悲劇の構造

——ホーホフート『ドイツーある恋の物語』——

一九七二年四月、西ドイツの週刊誌『デア・シュピール⁽¹⁾』は、あるドイツ海軍軍法会議の判決書の認証謄本を公表した。判決書の日付は一九四五年六月十九日、すなわちドイツの降伏（五月七日）から約一カ月半後である。

ドイツの降伏後、イギリス軍はノルウェーに温存されていた有力なドイツ海軍の兵力の武装を解除したものの、捕虜に比較してイギリス軍兵力が劣勢であったところから、捕虜収容所内の秩序維持を捕虜自身にまかせ、旧ドイツ海軍法務官に裁判権を委ねた。そのため、公表された判決書の日時が示すように、ドイツの降伏後も、このオスロフョルド地区ではドイツ海軍軍法会議が名実とも

に機能し続けたのである。

この記録によると、被告の水兵K・ベツォルト(Betzold)は当時二十四歳、一九四一年に志願して海軍に入ったが、ドイツ降伏から数日後、軍服の徽章から示威的に鍵十字をひきちぎったり、上官の指示に反抗して「このナチの犬ども、この戦争はお前たちの責任だぞ！」と罵ったりした。判決理由に引用されている上官の証言では、被告は「もともと中隊のなかで模範的な水兵で、下士官候補になっていた。以前はヒトラリーユージェント指導者であったというのに、五月一日以来何かと反抗的になり軍律違反の振舞いに出るようになった」という。

「以前はヒトラリーユージェント指導者であったというの

森 川 俊 夫

に」という表現は、ナチ時代の生活規範や価値基準が戦後もこの收容所内ではそのまま生きていくことを示しており、被告の行動を「信念の退廃」ときめつけている判決理由全体の調子も、第三帝国の価値基準に即しているようにみえる。したがって被告ベツォルトの上官に対するナチ呼ばわりも、かならずしも根拠なしとはしないように思われる。

このようにナチ的なものに対する強い反撥から上官に対して反抗的な行動に出た被告ベツォルトに対する六月の禁固刑は非常に苛酷なものと言わざるをえないが、しかし『シュピーゲル』が二十七年前のこの古い記録をもち出したのは、何よりもまず、ナチ的な信念におお共感を覚えているかにも見える軍法会議の裁判長が、当時海軍法務官であった現職のバーデン・ヴュルテンベルク州首相フィルピンガー博士だったからである。おりしも同州では州議会の選挙戦の最中だった。『シュピーゲル』の記事の冒頭には元被告ベツォルトの回想が紹介されており、裁判長は「われらの敬愛する総統」を「祖国を隆盛に導いた」として讚美していた、とあるが、一方「このような判決は收容所内の規律を維持して收容所当局の

干渉を排除するため必要であった。ついでに言えば、私が反ナチ的立場を堅持していたことは周知の事実であり、証拠がある」というフィルピンガーの談話も採録されていた。しかし西ドイツで最有力の週刊誌のこのような記事は、選挙渦中のフィルピンガー州首相にとって放置できないものであった。同首相は、一九七二年四月十日シュトゥットガルトの高等裁判所に記事差しとめ処分を請求して、八月七日勝訴の判決を受けた。同裁判所第十七民事法廷の判決理由には「証人ベツォルトの陳述には、それにもかかわらずいくばくかの重みがあることを、当法廷は認めないわけではない。そうではあっても、その陳述が、原告側が異議を申し立てている主張の真实性を納得させ得ないのは、ナチズムの時代における原告の姿勢についての原告自身の反論の余地のない申し立てから判断すると、証人の主張が原告の人間像にそぐわず、あまり真实性が感じられないからである。原告がすでに一九三三年、反ナチ的信念をもっていることが人々に知られており、そのためドイツ民族学生財団から排除され、のちに詩人ラインホルト・シュナイダーを中心とする反政府的として知られていたフライブルク・サークルのメ

ンバーになつてゐる以上、すでにナチズムの信奉者たちが原告の居住地では追及されていた戦後のある時点で、こともあろうに原告がナチズムの立場に立つようなことを発言したなどというのはありそうもないことと言えよう⁽³⁾とある。

裁判の結果『シュピーゲル』はフィルピンガーとの関係でヒトラーにかかわる右の主張の流布を禁止され、裁判費用の負担を命じられた。裁判所の決定に従い『シュピーゲル』は最初の記事から四カ月後の八月七日第三三号に、シュトゥットガルト判決についての感想を紹介しただけで、その後この件については触れなかった。

その間フィルピンガーの率いるバーデン・ヴュルテンベルクのCDU(キリスト教民主同盟)は議席の過半数を制する勝利をおさめた。もともとフィルピンガーの前任者は、ボン政府の首相になつたG・キージンガーである。一九六〇年フィルピンガーは州議会議員に選出されると同時に、第二次キージンガー州政府内相になり、第三次キージンガー州政府でも留任している。一九六六年キージンガー州首相が任期半ばでボン中央政府首相に転出したあとをおそつたのが、フィルピンガーである。フ

イルピンガーが引きついだこの州政府も、次の一九六八年の州議会選挙あとのフィルピンガーの州政府も、CDUとSPD(社会民主党)の連立政権であった。このように長期間にわたる同州の政治地図を構造的に改変させ、二度目の選挙でCDUの単独政権を実現したフィルピンガーの政治手腕は高く評価され、全国CDUにおけるフィルピンガーの政治的地位は飛躍的にたかまつた。

この選挙結果からすると、『シュピーゲル』の攻撃は所期の狙いを達成できなかったばかりか、逆効果であったかのようにみえる。しかし『シュピーゲル』の報道姿勢には、「中立、公正」をモットーにして権力との摩擦を回避するような臆病さはなく、一九六二年のいわゆる「シュピーゲル事件」⁽⁴⁾にも見られるような権力との対決も辞さないきびしさがうかがわれる。

本来、「中立、公正」の立場とは、特定のイデオロギイによって立つグループに属してその利害を代弁することをしない立場である。このことは個々の問題について判断を留保することを意味しない。それどころかその判断においてきわめてラディカルでさえありうる。もともとジャーナリズムの活動は本質的に取捨選択、すなわち

価値判断をとまなうものであり、判断を留保する「中立、公正」はジャーナリズムの自己否定でしかない。『シュビーゲル』は対象が権力の中枢に近ければ近いほど寡黙になるようなことはない。外部から資料を得てようやく批判の対象に立ち向うのではなく、自身の責任において発掘した記録にもとづいて対象に迫ってゆく。それが選挙中であろうとはばかりすることがない。それどころか、選挙中だからこそこの種の批判は必要なのだ。もちろん、問題が深刻であればあるほど批判は十分な裏付けを要求される。裏付けのない憶測、根拠のない中傷はジャーナリズムの自殺行為である。だからといって憶測、中傷のそしりを危惧するあまり、必要な批判、必要な情報の提供をひかえるのは、本末顛倒である。

『シュビーゲル』の記事は信憑性のある記録そのものをして語らせる形でジャーナリズムに課せられた節度を十分に守っているとみることが出来る。それにもかかわらず同誌が敗訴したのは、シュトゥットガルト判決が、軍法会議の判決書そのものよりも、この記録に付したコメントに重点を置いているからである。つまり、のちに明らかになるように、フィルピンガーのいわば絢爛たる

政治的閱歴が元水兵ベツォルトの証言の真实性を見る目を曇らせ、ひいては記録が明確に物語るところを無視させるにいたったのだ。

シュトゥットガルトの判決後約五年半を経過した一九七八年二月、『デイ・ツァイト』紙に「真実の物語を語る困難さ」と題するロルフ・ホーホフトのエッセイが掲載された。これは、当時まで発表されていなかった小説『ドイツーある恋の物語』の一部で、第二次大戦中の事件を発掘して関係者の証言を求める過程で遭遇したさまざまな困難について、つまり過去の事件を再構成するさいの障害を、事件そのものの経過とは独立に語っている一章である。

物語は、ベルギーに駐留している夫の留守中、野菜売りで生計を立てているパウリーネ・クローブ (Pauline Krup 仮名) と、近所の石炭、燃料商のところ配属されているポーランド兵捕虜スタシエク・ツァサダ (Stasiek Zasadza 実名) との、追いつめられた環境でのいたましい、それだけに情熱的な交情、そしてこのツァサダの処刑という無惨な結末を描いている。物語の舞台は、

スイスのバーゼルから国境をこえて十キロほどのレラハ (Lorrach) である。あるいは、今日ではこのレラハに合併されているブロムバハ (Brombach) という村が舞台だったというほうが正確かもしれない。

このブロムバハないしレラハは、シュトゥットガルトに政庁を置くバーデン・ヴュルテンベルク州に属しているが、ホーホフはこの帰属を手がかりに、州首相ハンス・フィルビンガーに対する挑発的な言葉を連ねた一節で、『ツァイト』のエッセイを締めくくる。この挑発の素材が、一九七二年の『シュピーゲル』に発表された、海軍法会議の判決書である。作者は、戦時中の事件の關係者が、加害者はむろんのこと、被害者である今日健在のパウリーネ・クロープでさえ、過去をあらためて照射することに関心を示さないと指摘したうえで次のように記している、「真実を知りたがっている者は、まさしく一人もいない、例外があるとすれば——まだ健在だとしてのお話だが——このポーランド兵の両親であろう。この両親の消息はわからないが、ヒトラー戦争前はロチュエ (Lodz) に自動車修理工場を經營していたはずである。真実を知りたがらないと言えば、バーデン・ヴュルテン

ベルク州には、あのポーランド兵と同じ(へ理由)でほかのポーランド兵をも杓子定規に絞首、すなわちくびり殺していながら、ぬくぬくと年金生活を送っている連中がいるわけだが、こういう連中をとらえることに誰よりも関心のないのが、州当局である。なんといってもこの州の現職の首相フィルビンガー博士は、ヒトラー死後イギリス軍の捕虜になってからもドイツの水兵をナチの法律で迫害したほどで、ヒトラーの海軍法会議裁判官として非常におそろしい(へ法務官)であったから、こういう人物が天下晴れて自由の身でいられるのは、同人を知る人々の沈黙のおかげでしかない、と推測せざるをえない——これが推測にとどまるのは、海軍法務官は、陸軍や空軍の法務官より抜け目がなく、戦争終結にあたって書類は破棄してしまっているからである」

海軍法務官が書類を破棄した云々の指摘から判断すると、ホーホフは、この時点では『シュピーゲル』に公表された記録が唯一の確実な拠りどころだったと思われる。シュトゥットガルトの法廷がすでに一定の評価をくだし、軍法会議の裁判長のその後の政治的閱歴に重大な疑問を抱かせるものとは見なかった「判決書」、その

「判決書」をホーホフートがあえて論難の論拠にしたのは、この「判決書」評価が承服できなかったからで、ホーホフートはむしろ「判決書」そのものが担当裁判官のナチ的信念を裏付けていると考えたのであろう。

これに対し、フィルビンガー州首相はただちに反応し、シュトゥットガルトの高等裁判所に仮処分の申請を行ない、記事の差しとめを請求して、ホーホフートと『ツァイト』を告発し、十万マルクの制裁金 *Ordnungsgeld* (これは導入されて数年にしかならない制度らしく、原告の勝訴にもかかわらず被告が同じ主張を反復すれば、裁判所で決定した全額を国庫に納入しなければならぬという) の決定を求めた。この時点ですでにフィルビンガーは、翌年、すなわち一九七九年に予定されていた大統領選挙にあたってのCDUの最有力な大統領候補と目されていた。しかも大統領選挙の投票権をもつ上下両院の勢力分布からみて、ボン議会上院の野党CDUの候補の当選は確実とみられていた。事実昨行なわれた選挙の結果、CDUのカール・カルステンズが選出されたことをみても、一九七八年二月段階の予想はまったく正確であったといえる。当時フィルビンガーはおそらくホー

ホフートの文章に、一九七二年の『シュピーゲル』による判決書の公表ほど痛痒を感じなかったのではないだろうか。一方は選挙戦という不安定な状況のなかでの暴露であるのに対して、『ツァイト』の記事は、政治的閱歴の頂点をきわめようとしている順風満帆のフィルビンガーにとって、いわば処理済みの古証文のむしかえしでしかなかったからである。

新たな裁判の過程でホーホフートは、自分の主張の誤りを一、二認めた。すなわち「天下晴れて自由の身でいられるのはこの人物を知る人々の沈黙のおかげでしかない」という主張は事実こそぐわないというのである。もともと第三帝国のあらゆる司法官がその活動のことで戦後訴追されたことがなく、そのため、ナチ的な経歴と信念をもった司法官が、ナチズムの否定のうえに出発した共和国で正義を代弁するというグロテスクな事態が生じ、それが明るみに出て政府が苦境におちいることがときおりあったが、ホーホフートは以前からドイツ司法界のこのアレクシス臆に批判を加え、第一作『神の代理人』の発表後のインタビューでは、次作は『法律家』と題する作品を考えている、と答えている。すべての司法官同

様、フィルビンガーも訴追されたことがないのだから、訴追を前提としての「天下晴れて」という表現は適切でない、というのである。

また、海軍法務官は戦争終結にあたって書類を破棄したとする主張も誤認にもとづくものであることが判明した。海軍軍法会議の書類がアメリカを含めて各地に分散保存されており、ホーホフト自身がフィルビンガーの関与した裁判記録をアメリカで発見したのである。それはヴァルター・グレーガー (Walter Gröger) という水兵に対する死刑判決の記録で、フィルビンガーはその裁判の検事であった。

水兵グレーガーは一九四〇年十七歳で入隊したが、しばしば軍規に違反して処罰され、兵籍簿には一九四四年はじめまでに十四回の懲罰が記録され、懲罰大隊に配属されて二回にわたって東部戦線に投入された前歴をもっていた。一九四三年十月ノルウェーのナルヴィクに碇泊中の軍艦シャルンホルスト号へ配属されることになり、そこへ向う途中オスロで約十日輸送便を待たされたグレーガーは、あるノルウェー人女性と知り合い、同棲するうちにナルヴィク行き便をのがしてしまった。この女

性の助言でスウェーデンへの逃亡も考えてみたが、結局思いとどまり、自首しようと考え直した。しかし、自首するより先に「秘密野戦警察」がグレーガーとそのノルウェー人の女友達を逮捕した。十二月初旬のことだった。

オスロの海軍軍法会議は翌一九四四年三月十四日グレーガーを敵前逃亡 (Fahnenflucht im Feld) のかどで八年の懲役と兵籍剝奪を宣告した。しかし同年六月十七日、ノルウェー駐留艦隊司令官⁽²⁾は、水兵グレーガーに対しては死刑が相当であるとして、軍法会議の判決を破棄する。そのため半年後の一九四五年一月十六日、グレーガーに対する再審が行なわれ、フィルビンガーの求刑のとおり、グレーガーは死刑を宣告された。ここでは、スウェーデンへの逃亡を「計画」したことが重視されているが、第一審では、考慮し計画しただけでは、未遂にもあたらな^いとして、最高刑の死刑とくらべて比較的軽い有期刑を宣告されたのである。しかし艦隊司令官としては温存してある有力な兵力の軍紀を厳正に保つため、グレーガーをいわば見せしめのために処刑することを狙っていたのかも知れない。少なくともフィルビンガーは一九七八年の裁判においては、「司令官の意をたいして」死刑を求

刑する以外に方法はなかった、といわゆる命令による非常事態 (Befehlsnotstand) によって自身の当時の行動を釈明しようとした。

戦争犯罪の法廷でたびたび繰り返されているこの釈明は陳腐とはいえ、法廷ではそれなりの有効性をもっている。しかしフィルビンガーの場合この弁明は空疎にひびいた。フィルビンガー自身が艦隊司令長官にかわって水兵グレーガーの刑の執行を命じたばかりか、処刑の執行官を買って出ているからである。一九四五年三月十六日グレーガーはフィルビンガーから刑の執行を申し渡される。フィルビンガーは、グレーガーに対して市民権が「終身」剝奪される旨告げる。二時間後に処刑される人間に対して、おそるべき杓子定規である。

結局フィルビンガーは敗訴し、大統領候補に選出される可能性を絶たれたのもちろん、州政府首相の地位も譲り渡さざるをえなくなった。

フィルビンガーは審理の過程で、たとえば「当時合法的であったことは、今日不当ではありえない」と自己弁護していたが、たしかにフィルビンガーは、法的手続き

を逸脱してはいない。それにもかかわらず、一国の元首に選ばれる可能性をもった政治家が、犯罪ではなく道義性を問われて失脚するには、きびしい政治気象、政治倫理の存在が前提となる。「当時合法的であったことは、今日不当ではありえない」という弁明は、西ドイツでは記事の冒頭に括弧つきで見出しになるくらい見当はずれの発言である。このような評価の根底にあるのが、第三帝国の犯罪性の認識である。この認識をもっともラディカルに表現しているのは、おそらくヤスバースであろう。第三帝国は、たまたま犯罪を犯した国家ではなく、その存在そのものが犯罪的な国家であり、連邦共和国は、その否定を出発点と考えなければならぬ⁽⁸⁾という。

その点わが国の状況は対蹠的である。「当時合法的云云」の主張は、「悪法も法なり」という考え方に通じるものがある。この言葉が日本ではたとえば国会で法務大臣が肯定的に口にしても物議をかもすことがない。戦後の一時期には、過去の一切を「封建的」と断じて否定するのが一般の風潮だったが、その裏返しである。いずれにせよ、過去についての認識の欠如を物語るものであり、今日、過去の復権がまるで無反省に行なわれていると言

わざるをえない。

昨春秋、新聞紙上を賑わせた江藤淳・本多秋五の「無条件降伏」論争のなかで、江藤が「だからこそ国家は、その〈暗黒〉に身を捧げた無慮二百五十万の戦死者の霊とともに、絶え間なく本多氏とその盟友たちを追いつけている。戦争に負けて氏らが〈ホッとした〉ときもそうである。今日にいたってもなおそうである。なぜならいかに口先だけで、また強権の下とはいえ、氏らが転向したとき、氏らは無慮二百五十万の戦死者の霊と連帯したことになるからである。そのことを……〈巨大で奥深い存在〉である国家も、〈暗黒〉に身を潜めた死者たちも、決して忘れてはいないのである」⁽¹⁰⁾と書いているが、江藤にとって国家は批判の埒外にある絶対的なものであり、二百五十万の戦死者はそのような国家と間然することなく一体のものである。「いったい本多氏の胸には、日本が敗れたとき一片の痛みも哀しみも浮かばなかったのだろうか？」日本の敗北に対する痛恨から（としか読めないが）、日本の敗北に「快哉を叫ん」だ「口先だけ」の転向者たちを国家とともにいまなお追及してやまない江藤は、「二百五十万の戦死者」たちの哀しみや怒りに

思い至らないらしい。さもなければ、無益な犠牲を強い国家と犠牲者たちを一体視することなど考えられないからである。江藤の文章の行間には、治安維持法、「靖国神社」、そして旧憲法下の天皇制が、つまりは過去の日本が、その無反省な姿をのぞかせている。

過去をそのまま復権させようという江藤の考え方は、しかし、日本の現実を實質的に支配する保守的な政治勢力の気分を代弁している。もちろん西ドイツでもフィッピンガーの例が示すように、過去の亡霊が民主主義の衣裳をまとうて戦後の現実のなかで指導的役割を演じることもある。しかし西ドイツにはフィッピンガーのような事例を病的なものとして処理することを可能にする装置がある。それは、日本ではついに見送られた、自国民の手による戦争犯罪の法的処理である。過去に対する厳格な態度が倫理的観念的な次元にとどまらずに、法的次元において制度化されていることの意味は大きい。そこでは、なしくずしに過去が復活することはありえないからである。そこでは過去の告発が空しく終ることなく、有効性を発揮する。

すでに記したように、ホーホフートが『ドイツ—ある恋の物語』のなかでフィルビンガーに触れたのは、作品の意図からすれば副次的なものである。しかもそれが大きな政治的波紋を生んだのは、決して偶然ではない。ある意味ではホーホフートの文学の本質を象徴するものともみるべきかもしれない。

ホーホフートは一九七六年バーゼル市から芸術賞を授与されたときの感謝の演説のなかで、『悲劇的文学史』の著者ヴァルター・ムシュクに触れて「その最後の言葉は、当時飛ぶ鳥をも落さんばかりの勢いだったフランクフルト学派への宣戦布告でした。この学派が、へ文学のなかに外部からはいりこんだ意義なるものの痕跡は、芸術における無条件的に非芸術的な部分である」などという馬鹿げた法則を定式化し——アドルノが要求するよう
に——〈現実との社会契約を破棄〉して、アドルノが〈自律的〉と呼ぶ芸術を生み出すことをしない芸術家は政治的に告発する、などという習慣を連邦共和国に持ちこんだからですが、この学派が消滅した今も、この習慣だけは残っています⁽¹¹⁾と語っているが、ホーホフートの文学は、まさしくアドルノの要請する芸術とは正反対に

「現実との社会契約」を前提とし、アドルノが「自律的」と呼ぶ自己完結的な殻のなかに閉じこもるところか、その殻を破って現実とのつながりを見出すことに文学の重要な役割を見ているのである。

アドルノは「今日の個人の危機の原因は、かつては社会によって要求された質が、おそらくは質のカテゴリーそのものが、新しい生産方法によって無用の長物と化しているところにある……人間が生産方法にに応じて形造られるというのは嫌悪すべきことだが、しかし人間が社会生産を支配するかわりに、それに呪縛されているというのが世の成行なのだ⁽¹²⁾」として、その現実の不条理を見出す。生産手段は人間のために存在し、人間を無用な労働から解放する目的を有しているのに、それによって個性が消失するからである。そのためアドルノは、個性の消滅を認めないドラマ、個性の消滅の時代にあつてなお登場人物の自由を問うドラマを認めようとし⁽¹³⁾ない。アドルノがホーホフートのドラマを批判するのはそのような立場からである。アドルノが許容するのは、「不条理演劇」であり、現実の不条理性の芸術的反映、昇華であつて、それが逆に現実に働きかけることは、非芸術的だ⁽¹⁴⁾というの

である。ホーホフトの反批判に対してアドルノは、不条理性を認識することは、不条理性を容認することにはならないという意味のことを言っているが、アドルノの芸術観は、現実の不条理性を容認せずに告発するようなことを許さない現実肯定的なものでしかない。

『ドイツある恋の物語』の舞台は、スイスやフランスと国境を接している地方の村である。働きざかりの男たちが出征したために生じている労働力不足を、ポランダの捕虜が補充している。この捕虜たちはそれぞれ「雇用主」の家に分宿して労働に服しており、ほとんど監視を受けていない。規則により、捕虜たちは「雇用主」と一つのテーブルで食事することは許されないし、夜の九時以降は自室から外に出ることは禁じられている。それにもかかわらず、この禁令はかならずしも守られておらず、捕虜と住民との関係はおおむね良好である。そのためゲシュタポの記録によると、捕虜が住民の女性と恋愛関係におちることもしばしばあったという。

野菜売りのパウリーネ・クロープと捕虜のスタシエク・ツァサダの恋のきっかけになったのも、顔見知りの

三人の子持ちの女性が捕虜の子を宿したために自殺に追いこまれ、相手もゲシュタポに連行されたというニュースである（「ロージ・リンドナー」の章）。この悲劇をきっかけに、スタシエクはかえって気持を抑えられなくなり、パウリーネに恋を打ち明ける。パウリーネは心惹かれるものを感じながらも、息子の本能的な拒否反応や、年若の男との大きな年齢差などを考えて、おいそれと応じることができない（「薄明」）。同じ捕虜仲間の一人と燃料商メルヒオルの家の一室に同居しているスタシエクは、その夜、この恋がたとえ死を意味しようとも、これを成就させようと決意する（「男は考える」）。パウリーネは、忍んできた男の要求にそのままたえることができない。妊娠は破滅を意味するからである。前夜のことを反芻しながらパウリーネは、避妊具を買いに遠い町まで出掛けに行く。捕虜のスタシエクはもちろん、パウリーネも顔を知られているところではそれを購入できる立場ではないのである（「女は考える」）。パウリーネの住居と一枚の壁を隔てて隣りに住んでいるマリーアは、同じく夫が出征して生活が不安定であるだけに、パウリーネの店の繁昌が羨しい。ちょうど休暇で戻った空軍パイロットの

夫に、パウリーネとスタシエクの親密さをほのめかしながら、隣の店が欲しいとねだる。パイロットは、ドイツ空軍の敗北を認識し、自身の明日も知れないところで、物欲や肉欲の権化のような妻に嫌悪を覚える（「故郷、お前の星たち」）。パウリーネとスタシエクの関係は、死の影が迫っているだけにいっそう激しく燃えあがり、夜の中庭で寒さとたたかひながら忘我の時を過す（「陸言」）。スタシエクは扁桃腺炎を起してレラハの病院に入院する。有能なスタシエクの健康を早く取り戻したいと、メルヒオルが規定に反して入院させたのだ。二週間経ったころ、そのメルヒオルのところから電話がかかり、「スタシエクのところは女がたずねてきて、人前で接吻をして病院中にショックを与えた」と苦情を言われる。噂が大きくなり、捕虜を入院させたことがその筋に知れてはたいへんだというのである。メルヒオルは、その女というのが、バイエルンに転属してきた夫のもとへちょうどその日トランクをかかえて出掛けたパウリーネだと察知する（「レラハ、エリーザ、ベト病院」）。パウリーネは、店の帳簿つけを手伝ってくれていたシュニットゲンス夫人に、スタシエク宛ての手紙を渡して欲しいと夫のもと

から言って寄こす。しかし、二人のことが噂になっているところではうかつなことはできず、手紙のことを知った村長で村のナチ党責任者ツィングルーバーとしても放置できずに、レラハのゲシュタポに通報、ゲシュタポの所長マイヤーはこの手紙を押収して、二人の逮捕にふみきる。（「總統の命令の実行者たち、いくつかの例」）。ゲシュタポのマイヤーはパウリーネに心惹かれ、スタシエクに対しても好意的になる。ゲルマンの人種的特徴をそなえたポーランドの捕虜がドイツ人女性と性交渉をもった場合、前もってそれが死刑に値する犯罪だと教えられていなければ、ドイツ国籍を取得させるといふ通達があり、マイヤーはこれによってスタシエクを救うことができ、ひいてはパウリーネを喜ばすことができるのではないかと考える。しかしそのマイヤーのもとにベルリンから、スタシエク・ツァサダをすみやかに処刑すべしという指示が届く（「レラハ、国家秘密警察監獄」）。マイヤーはスタシエクの絞首刑にあたって直接手を下す刑吏として、同じポーランド兵捕虜で、仲間の脱走を幫助した嫌疑で捕えられているヴィクトロヴィツに白羽の矢を立て、懸命にこばむのを無理やり承知させ、スタシエクをその

監房に移す。「規定により」その仕事の代償は三本のたばこである（「三本のたばこ」）。同じレラハの監獄にながれているパウリーネはスタシエクの若い命を思う。一九四一年十月十六日（五年後のこの日ニールンベルクでナチの領袖の一部が絞首刑に処せられる）にはスタシエクが処刑されるときまったことをパウリーネはまだ知らない。その前日十五日パウリーネは逮捕以来はじめて中庭にスタシエクの姿をみかけ、「許して！」と絶叫する。「喜んで死ぬ」というスタシエクの言葉にパウリーネは卒倒する（「監獄につながれて」）。スタシエクは、ヴィクトロヴィツと最後の夜を過す。「規定により」家族に対して別れの手紙を書くことすら許されない。ドイツに対する復讐をたのんだ相手のヴィクトロヴィツよりも、スタシエクのほうがむしろ冷静である。（「別れの手紙は無用」）。歴史の学徒で、教授資格を取得しようとしているヴィクトロヴィツは、歴史の事例からドイツの敗北を予言し、ポーランドの復活を断言してスタシエクを慰める（「漁夫とその妻のお伽話」）。処刑場にマイヤーと同行する管区医官は六十歳の老体で、不愉快な仕事にかりだされた憤懣もあって、処刑に関する規定細目に対して

さまざまな懸念を口にし、中央からの指示の解釈の仕方についてマイヤーを不安におとし入れる（「管区医官の頭のなか」）。スタシエクは、恋を知って満足しながら死んだと両親に伝えるよう、処刑場へ向かうトラックのなかでヴィクトロヴィツに頼む。ヴィクトロヴィツは、命令によって処刑場へ向かう四百人ほどの同国人捕虜を見て、逃亡の可能性を考え始める。人数から考えてドイツ側を制圧するのは簡単だからである。しかし、処刑場はブロムバハの役場の前のように比較的せまくて暴動にかっこうな場所ではなく、村はずれの石切り場で、しかも捕虜の到着前に処刑が済むようになっていた。スタシエクは取乱すことなく死ぬ。村長ツィングルーバーは、二人の関係の動かぬ証拠をおさえた本人であるが、その妻の証言によると、処刑のあと二週間は昼食がのどを通らなかつたという（「石切り場」）。

物語の内容の深刻さをひとまず度外視して手法的に見ると、語り手は全知の立場から事件の全体を俯瞰するという姿勢で一貫することをしない。しばしば登場人物の限界のなかに身を置いて、その視点で事態の進展を語る

とともに、その内面の激しい揺れを精細に語るのである。たとえば「男は考える」「女は考える」の章は、それぞれスタシエクやパウリーネが他の章と同じように三人称で登場しながら、実際は語り手が二人の視線で事の次第を眺め、二人の内面を語っているため、ときにはほとんど独白に近づいてくる。これは主人公の二人の場合にかぎらない。ゲシュタボの責任者のマイヤーにせよ、マリアの夫のバイロットにせよ、スタシエクの絞首に手を下すように命じられた未決囚で捕虜のヴィクトロヴィツにせよ、それぞれが中心となって物語が語りすすめられる章でも、同じ手法が用いられる。

これはしかし技法的に興味があるというだけの問題ではない。ここでは、事件の登場人物と読者のあいだに介在する語り手が登場人物のなかに解消することによって、登場人物の不安、恐怖、歓喜、願望、絶望がじかに読者に迫り、なまなましい印象を与える。物語の性質上、効果を云々するのははばかられるが、この手法によって、登場人物のはげしい息遣いさえ伝わってくる。

視座のこのような移動はかなり融通無礙に行なわれている。たとえば、章ごとに視座が変わるが、その章のなか

では一定している、というのではなくて、一つの章のなかでも視座が全知の語り手の位置から次第に登場人物のうちの一人の視点に移行し、また必要に応じて元の位置に戻るといふ場合もある。こうして、監獄につながれたパウリーネの章のなかに、たとえばベルリンの詩人ゴットフリート・ベンがそのころ友人宛ての手紙のなかでドイツの敗北を予言した話が盛りこまれる形式的な可能性が確保されているのである。

この物語では、このような形式的な可能性は十二分に利用されていると言える。本来の恋の物語のなかで利用されているばかりではない。梗概のなかで紹介した章と章のあいだには、恋の物語とはかわりがないようにみえる一つ、ないし二つの章が挿入されているのである。

たとえば最初の「ロージ・リンドナー」と「薄明」の章のあいだには「二人のドイツの哲学博士が一九三八年にポーランドを観察する」という章がひとつはいつている。ここでは、歴史の研究者で作家としても期待されていたが、ベルリン陥落のときに行方不明になったフェーリクス・ハルトラウプと、ヒトラーに最後まで忠実だった宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスとがドイツの知識人の相反的

な典型として紹介されている。ポーランドのハルトラウブがヒトラーとその徒党によって破滅へ追いやられてゆくドイツの運命を予感するのに対し、ワルシャワのゲッターを視察したゲッベルスは、「ここにいるのはもはや人間ではない、けだものだ」と日記に書きつけ、この印象からユダヤ人絶滅政策への共感をもつようになる。そのゲッベルスは、イギリスのポーランドに対する援助約束を笑いとばすが、結局それがヒトラーのドイツにとって、したがってゲッベルスにとって命取りになる。

この辺境の恋物語にこうしてゲッベルスが登場するのは、たんにポーランドという共通項をもつからというだけではないし、ホーホフトの恣意によるものでもない。プロムバハの恋人たちとほとんど何の関係もないように思われるゲッベルスだが、そのゲッベルスが重要な支柱の一人となっているナチの支配体制こそ、スタシエクの運命に悲劇の枠組を与えた理不尽な力なのである。この恋が悲劇的結末をみたのは、人間の力の及ばない宿命のせいではない。権力を握るに至った、本質的には無思想で低劣な人間の偏執狂的な思いつきが、古今東西はもちろん、ドイツでも第一次大戦当時までは犯罪を構成する

ことのなかった、捕虜と現地女性との恋愛を、最高は死刑をもって処断されなければならない犯罪に仕立てあげてしまったのである。

「病状報告Ⅰ・時代の精神」「病状報告Ⅱ・ハインリヒ・ミュラーの緊急通達」などの章では、捕虜の強制労働者どドイツ人女性とG V（性交渉を意味するナチの略語）に対するヒトラー、ゲーリング、ヒムラーなどの異常な関心と、問題のとらえ方の差から生ずる方針の混乱などが報告されている。しかも非常に非能率な第三帝国の支配機構のなかでこの問題を扱う部局は、官僚、行政機構から党組織に至るまで、十の部局に及んだという。ドイツを含めて過去の国家が黙過してきたような種類の問題によって支配機構にこのような負担をかけるなどというのは、愚かと言わざるをえない。しかし愚かさによって、権力をもつ人間の力は当然のように減損するものではない。むしろその逆である。権力をもつ人間が愚かさから非常識な行動に出ても、しばしば周囲の人間は、それが愚かにみえるのはみかけだけのことで、実は常人のうかがいしれぬ深い計算があるに違いないと考える。一九三三年政権を握ったヒトラーが、大方の予想に反し

て政権を維持しえたのは、権力の生み出すこの錯覚によるところが大きい。しかし実際には権力は、いつもそれにふさわしい人間が握るとはかぎらないのである。

「オデュッセイア。一九四〇年」の章は、チャーチルの巧妙な対独戦略とその完璧ともいふべき成功を分析することによって、ヒトラー、ゲーリング、ゲッベルスなどの、政治的、戦略的見通しのくらさ、場あたりの作戦の無謀さを際立たせている。チャーチルはダンケルクの撤退後、ヒトラーに三つのトリックをかけたという。第一に、イギリスは降伏の用意があるという噂を流布させたこと。もともとヒトラーは、ダンケルクで英仏軍を潰滅させるチャンスを見送ったことから推測されるように、イギリスとの決定的な対決は望んでおらず、したがって英本土上陸は考えていなかったとはいふものの、ここで流布された噂は、ヒトラーにイギリスは戦意なしと思わせ、ひいては二正面作戦の暴挙を伏意させる伏線になっている。第二にチャーチルは、ゲーリングの空軍を巧妙にロンドン上空へと誘い出して空軍基地の安全をはかるとともに、ドイツ軍機に対して、決定的な打撃を与えることに成功した。これは「イギリスの戦い

Buttle of Britain」と呼ばれるが、これによってドイツ空軍はついにヨーロッパの制空権を握ることが出来なくなったのである。第三にチャーチルは、ベルグラードの民衆の蜂起に援助を与え、これによってヒトラーのロシア侵攻の日程を狂わせた。ヒトラーは、冬がくるまえにロシアを処理するつもりであったから春のうちに侵攻を開始する予定にしていたのだが、結局一九四一年六月二十二日（ナポレオンも一八一二年のこの日にロシア遠征を布告している）になって攻撃命令を出し、ナポレオンと同じように敗北へと大きく一歩踏み出したのである。

「ハインリヒ・ミュラーの緊急通達」の章は、狂気の支配の心理学ともいふべき性格をもっている。それは、ファシズムの心理学にとどまるものではない。権力と個人の結びつきが問題になるかぎりには、きわめて今日的問題であり、当時の交戦国もこの狂気から免れることが出来なかった。ドレイスデンの絨氈爆撃による完全な破壊と八十万余の非戦闘員の殺戮、非人間的実験としか考えようのない広島、長崎への原爆投下は、そのもつとも悲しむべき例である。

悲劇を生み出す権力の構造についての考察の諸章は

はじめ、辺境の恋物語とはほとんど無関係のような形で語り起されるが、やがて、これらの諸章の認識が、たとえば歴史研究者である捕虜のヴィクトロヴィツヤスタシエク、あるいはまた次元の違いこそあれゲシュタポのマイヤーや、村長のツィングルーバーなどの認識になるにつれて、本来の物語の章のあいだに挿入される章は少なくなっていく、同時に事件は終局へと息もつかせぬ勢いで進んでいく。ホーホフートがこの事件を「発掘」したとき、おそらく、権力の中核にある人間を主人公ないしはそれに近いものにするホーホフートのドラマに対する、アドルノなどの批判が頭をかすめたかもしれない。しかしホーホフートがこの辺境の事件をとりあげたのは、この種の批判を部分的に認めたためではない。もともとホーホフートは、権力が生み出す災厄の犠牲になりかねない存在の立場から、権力と権力者のありようを執拗に追及してきたのである。その意味からすれば、この作品はホーホフートの関心のありようを総体的に表現したものとと言えるであろう。

(1) 一九七二年第一六号。

(2) ヒトラー自決のニュースが伝わって以来ということである。

(3) 『ディ・ツァイト』一九七八年第二〇号からの再引用。

(4) 一九六二年九月末、国防軍の機密を漏洩したとして同誌の幹部が逮捕され、手入れのため社屋での業務は不可能になった。各方面からの援助で雑誌の発行はどうやら続けられたが、言論の自由の問題とからんで大きな論議を呼んだこの事件の背景には、同誌と、同誌によって執拗に攻撃されていた当時の国防相フランツ・ヨーゼフ・シュトラウスとの険悪な対立があった。

(5) 一九七八年第八号。

(6) この作品が刊行されたのは一九七八年秋である。なお、著者自身はこの作品を「小説」とは呼ばずに、Geschichteと言っている。「出来事」としての「物語」の意であろう。

(7) 一九四八年ニュルンベルクの国際軍事法廷で無罪となり、一九六四年リンツで死去したオト・シュニーヴィント提督。

(8) たとえば『シュピーゲル』一九七八年第二〇号。

(9) 『シュピーゲル』一九六五年第一一号には、戦争犯罪時効問題に関連して、同誌発行人ルドルフ・アウクシュタインとの対談が掲載されている。この対談では、連邦共和国のあり方が過去の歴史と関連して具体的に説明されている。

(10) 毎日新聞、一九七八年九月十八日号「再び本多秋五氏

へ」

- (11) ロルフ・ホーホフート『一九三八年のテル』十一ページ。Rolf Hochhuth, *Tell* 38, Rowohlt Verlag 1979.
- (12) 『フラクンフルター・アルゲマイネ』一九六七年六月十日号。『ロルフ・ホーホフートへの公開書簡』Theodor

W. Adorno, *Offener Brief an Rolf Hochhuth*.

- (13) さしあたり思いつく例では、伊藤整の『氾濫』が、章ごとに特定の人物を語り手の視座にしている。

(一橋大学教授)